

Title	カルワンの利子と自然法
Author(s)	澤崎, 堅造
Citation	經濟論叢 (1939), 48(2): 397-408
Issue Date	1939-02-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131208
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第二號

昭和十四年二月

論叢

貨幣的利子論の吟味……………文學博士 高田保馬
中小都市における商店街の構成……………經濟學博士 谷口吉彥

時論

最近に於ける通貨收縮性の遲緩……………經濟學博士 小島昌太郎
事變下に於ける漁村對策……………經濟學博士 蜷川虎三

研究

豫想の構造の分析……………經濟學士 青山秀夫
莫大小業の生産形態……………經濟學士 堀江英一

カルブンの利子と自然法……………經濟學士 澤崎堅造

經營分析における比較の意義と形態……………經濟學士 岡部利良

說苑

支那の村落……………經濟學士 宮本又次

財政統計の地方比較……………經濟學博士 汐見三郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

カルブンの利子と自然法

澤崎 堅 造

目次	一
二	カルブン利子論の根據
三	モリネウス利子論との比較
	カルブンの自然法

カルブン利子論の内容は、先述の如く、¹⁾ 微利是認を極く積極的に述べたものであるが、それには同時に幾多の條件と制限とが附されてあつたことを注意しなければならない。まづそこで述べられた微利是認の根據といふものは、第一には自然の生産性と結實性及び經濟上の収益性といふ點である。自然に於ける生産性とは土地・海・樹木その他動植物からの獲得・生産・増殖等を指し、またそこに人間の力・働き又は關係が加はつて種々なる便益や價値の増加を來たし、從て經濟上の利益を齎す。こゝに於て利子の發生の原因を見ようとする。第二は、使用性の點である。人が他人から金を借りる。その借りた人はたゞそれを消費のために費したり、死藏したりする筈はない。何らかの方法を以て或る収益を齎すべきものを購入し又は投資するとかに用ふ。從てそこから得られる収益の何分かを債權者に對して返へすといふことは當然であるとする。即ち貨幣又は道具又は設備等の使用に

1) 拙稿「カルブンの利子論」本誌昭和十三年九月號所載。

對して一定の報酬を齎すべきことを豫想する。こゝに利子の發生を見る。第三には賠償性の點である。もし債務者が返却を遅延したならばそれに因つて生ずる債權者の損失に對して、債務者は賠償の責を負ふものとする。これに二つの場合がある。債權者が現に被つた損失の賠償と、債權者が貸出さなかつたならば得た筈の収益の喪失に對する賠償とである。

こゝに於て我々はカルヴンが時代の狀勢に密接な關聯があつたことを見出さざるを得ない。彼の時代には企業を起して損をすると云ふことは殆んど考へられなかつたのである。カルヴンは債務者についても「富める債務者」の例を屢々擧げてゐるし、債權者側についても殆んど常に収益の擧げられることを豫想してゐるのである。右に述べたカルヴンの微利是認の根據には更になほその根柢にも、一つのものがあつたことに氣着くのである。それは即ち自然法の觀念である。先きに示したカルヴンの「利子に關する手紙」の中にも、「微利は聖書の或る章句によつてではなく、たゞ衡平法 (la règle dequie)²⁾によつて判斷さるべきである」、また條件の第三を述べる際に「自然的衡平 (equité naturelle) の範圍を出てはならない」³⁾「それは基督の法 (la règle de Christ)⁴⁾によつて確められる」等と云ひ、更に「粗野なる習慣」(la coutume vulgaire)⁵⁾に従つてはならないとか、法は神の言葉 (la parole de Dieu) によるべきであるとか云ふ。また「聖書講解」の中にも、「微利者はダビデやエゼキエルによつて絶対に禁ぜられてゐると云ふならば、余はそれを更に仁愛の法 (norma caritatis) によつて判斷さるべきであると思ふ。……彼らが詛はれたのは、債務者が衡平 (equitas) を見ないで、債務者を壓迫してゐるからである。……古代の人々が微利を禁ぜられてゐたことは明かである。併しそれは彼らの政治的命令の一部であるといふ必要がある。だから微利

2) Corp. Ref. Opera Calvinii, Xa S. 247 f.

3) ibid. 248.

4) ibid. 249

5) ibid.

は今、不法なのではない。たゞそれが衡平 (aequitas) を守り兄弟的結合を破らない限りは。」と云つてゐる。⁶⁾

なほ更に彼が事實を見ることを薦め、實際を尙べといひ、慣習を重んずるといふ點などは、何れも自然法・衡平法・慣習法などを重視したといふことになる。併しそれを更によく視るならば、彼の云ふところは普通一般に云ふ自然法の考へとは餘程違つてゐることがわかる。この點を明かにすることが本文の主たる目的であるが、その前に一應モリネウスの利子論の根柢としての自然法と比較して見ようと思ふ。

II

モリネウスの利子論といふのは、一五四六年の「契約と利子に關する小論」(Tractatus contractuum et usurum, reddituumque pecunia constitutorum) が有名である。その論旨は大體に於てカルヴンと同じく、從來の徴利否認説に反對し、事實に基いて徴利是認を論じたのである。ペーム・バベルクが「新しき學派(徴利是認)の最初の闘士は宗教改革者カルヴンと佛蘭西法學者ドウムラン(モリネウス)である」²⁾、また「カルヴンが從來の禁止法典に對して理論的根據に基いて反對した最初の神學者である、と同様にモリネウスは最初の法學者である」³⁾と云つてゐる。カルヴンが宗教的に聖書や信仰に基いて簡直に訴へたのに對して、モリネウスのは法律的に稍々遠廻しの言ひ方を以て論述した。従てその態度・方法に於ては少しく異なるが、兩者の利子論の内容については極めてよく似てゐる。殊に所謂「富める債務者」の例については兩者共に極めて重要なものとして掲げてゐる。いまモリネウスの言ふ所によれば、その論文の第一部の初めのあたりに、「有資産の商人が、假りに貨幣をば、合法的商業から利益を得んために借りて、月々に又年々に利子 (usury) を支拂ふとする。但し豫期されたる利益の一部分である限

6) C. R. O. C. XXIV. Vol. II. P. 682. Calvin's Commentaries on the Four Last Books of Moses (Calvin Translation Society, Edinburgh, 1854), III, p. 131 f.
7) Carolus Molinaeus (1500-1566), 佛蘭西名は Charles Dumoulin, 巴里に生れ Orlean 並に Poitiers の大學で法律を學び、後者で講義をしたが、後巴里で辯護士となつた。既にユグノーとなつたため迫害され、逃れて獨逸に行き各地

り、それを約束するとする。その貸付者は、その金額の *interesse* (これは元本支拂の遅延により「蒙れる損失」又は「阻止された利得」の意味⁴⁾)に對する主張を證し得なくても、または多分幾らかの利子 (*interest*) でも、法律的に契約したり又は債務者を害することなしに利子 (*usury*) を受けることが出来ないであらうか⁵⁾と云ふ箇所がある。かゝる隣人の必要さに應ずるため、殊にその隣人が貧しいのでない場合に貸付によつて利子を取得することが是認されないであらうかと云ふ。徴利の禁止は却て仁慈に反することとなる。また徴利は事實に於て行はれてゐる。この點をその論著の第二部で詳しく述べてゐる。徴利は實際法廷でも認められてゐる。(勿論市民法廷であるが)かくて尙詳細に從來の禁止説を擧げて一々それを論駁してゐるのである。

いまその内容について詳しく述べる暇はないが、要するに彼の徴利是認の論據となつたものは之を數へると大體三つになる。第一は事實を認めるといふことである。そのために經驗と常識とを重んじようとする。教會法典よりも市民法を採らうとする。この點については新教徒をさへ批判してゐる。メランヒトンを論評してゐる點などは注目さるべきである。⁶⁾かくて彼は屢々「常識」、「實際上の經驗」又は「日常の商業實踐」などの言葉を用ひてゐるのである。第二の點は、必要⁷⁾性といふことに於てである。曰く、「貨幣の發明が交換や人間の必要のために有用である様に、*usury* もそれ程大ではないが、發明されたものである。商業にある人々は他人の金を使ふ必要が屢々ある。すべての場合に組合を造ることは便宜ではない。(これが從來の合法的なるものゝ唯一ではあつたが。) なほ商業に携らない人にも時には、そう屢々ではないが、正しき不意の必要さのためからして他人の金を一時的に使用することが是非必要なことがある⁷⁾」と。第三の論點は合法⁸⁾性といふことである。彼は法的な規準といふものを

で法律を講じた。佛蘭西慣習法、封建法に殊に造詣深く、その著書は後ナポレオン法典制定の際、主要なる基礎となつたといふ。

- 1) A. E. Monroe; *Early Economic Thought*, Cambridge 1924, p. 105-120 に英譯されてゐる。
- 2) Böhm-Bawerk, *Capital und Capitalzins* I, s. 31.
- 3) *ibid* s. 33.

極めて重く視た。從來の羅馬法、市民法又は佛蘭西慣習法並に封建法等に殊に詳しかつたからでもわかる。最後には條件としてカルヴンの場合と同じ様に、利率の限度といふものを論じてゐる。賠償的なものと商業的なものについて可成り詳しく述べてゐる。それはこの論著の第三部になつてゐる。

註、カルヴンとモリネウスとの關係については、兩者ともに佛蘭西人で、年齢も大差なく、大學も同じうし（但し同級ではなかつたらうが）、共に法律を學び、共に新教徒となり、迫害され、國外に逃亡したのであるから、極めて親しい關係があつたことは明かである。モリネウスは宗教的にはカルヴンの影響を受け、自らカルヴン主義者たることを誇りとしてゐる。¹⁰⁾

カルヴンの「利子に關する手紙」の年代は不明であるが、モリネウスの利子論の出た一五四六年よりも前でないことは明かである。何となればモリネウスはメラントンは引照したが、カルヴンには少しも觸れてゐない。實際カルヴンの利子に關する關心は極く晩年程強くなつたのである。故にカルヴンの利子論が、モリネウスの影響を受けてゐるのではないかと疑はれる。利子論の内容に於て、論旨が大體似てゐることは勿論だが、所謂「當める債務者」の例に至つては兩者共通であり、殊にカルヴンの晩年の聖書講解にも引かれてゐるのである。併し勿論そこにもモリネウスの名前は全然出てゐない。ベームはカルヴンの方が影響を與へたやうに敘述し、¹¹⁾ アシュレーは反對にモリネウスが影響を與へたとしてゐる。¹²⁾ この問題は勿論明確にわかるわけではないが、上述の如くにして、利子論に於ては大體カルヴンがモリネウスから間接に影響を受けたものと思ふ。

カルヴンとモリネウスとの利子論の相似たる點については以上述べた通りであるが、その相異點については、また却てその共通點が問題になるのである。利子は認の根據に於て、第一に事實を重んじたものではあるが、カルヴンが期待利益の賠償といふ點まで進んで認めようとしたのに對して、モリネウスは全く事實そのものに留らうとし、純客觀的な現實損失をのみ問題としようとした、第二の合法性については、共に市民法、衡平法及び神法

4) Monroe, p. 106. a. 5) *ibid.* P. 106 6) *ibid.* p. 115. 7) *ibid.* p. 116 f. 8) 一般には 6 歩、時には 8 歩までを認めた。cf. Monroe, p. 118.
9) Calvin (1509-1564), Molinaeus (1500-1566).
10) R. Schwarz, Johannes Calvins Lebenswerk in seinen Briefen, Tübingen, 1909, II, S. 20 f.
11) Böhm-Bawerk, S. 33 f.

を擧げてはゐるが、カルヴンは神法を特に重んじてゐるのに對して、モリネウスは市民法又は慣習法をである。神法はたゞ附け足りの様で、何もその内容については觸れてゐない。要するに、兩者共に利子は認の根柢として自然法を置いたのであるが、カルヴンはそれを神法に於て、モリネウスはそれを慣習法に於て理解してゐる模様である。

三

カルヴン利子論の根柢としての自然法を明にするためには、一應自然の概念について彼が如何に考へたかを述べる必要があると思ふ。

(1) 自然¹⁾——カルヴンの自然は、一言で云へば、創造の自然である。それは單に無機的な自然とか自然法則とか動植物界とかを意味するのみでなく、人間を、社會を、社會秩序をも含めた意味に用ひられる。そして人間がその中心をなしてゐる。而も一切の上に神の統治があることを前提となしてゐる。

創造に關しては、創世記にあるやうに、神が天地を創り、生物を造り、遂に「神の像の如くに」²⁾男と女とを造り、自然界を統治する秩序の關係に置いたとする。この世界は實に「美しき劇場」(pulcherrimo theatro)³⁾である。曰く、「天と地とを宛ら極めて精妙にまた同時に極めて豊麗に裝備され且つ充實されたる宏大にして壯麗なる館のやうに能ふ限り一切の事物の極度の豊富、多様、美を盡して驚異すべく飾り給ふた。最後に人間を型り且つこれを斯の如く美しく飾りまた斯の如き天賦にて際立たしめて、人間に於て彼の業の最も顯著なる標本を現し給ふた」⁴⁾、また「我々が何處へ兩眼を向けるとも目撃するものが凡て神の業であることを記憶し且つ同時にこれらのも

12) W. J. Ashley, An Introduction to English Economic History and Theory. 野村兼太郎氏譯五六四頁。

1) 所謂自然神學の問題として、目下最も論議されてゐるものゝ一つであるが、特に有名なものは E. Brunner, Natur und Gnade, 1934, S. 22 ff. K. Barth, Nein! Antwort an E. B., 1934, S. 32 ff. P. Barth, Das Problem der natürli-

のが神によつて造られた目的を敬虔な考慮を以て熟考することは主要ではないとは云へ、自然の順序に於て信仰の第一の典據である」⁵⁾とも云ふ。またこゝに於て備へられた人間が如何に秀れたる資質を與へられたものであるかについて、人間は「神の像に象つて」造られたものであり、神の姿を寫す鏡⁶⁾であり、「神の像の固有の座位がある」⁷⁾。また「宗教の種子」⁸⁾が撒かれてゐる。人間の靈魂は神の審判に應答する良心を持ち、神を識る意志と心とを持つてゐる。「こゝを以て哲人等の或者等が昔時に人間を、*mikrokosmos* と稱したのは不當でなかつた。何故と云ふに人間は神の力、善と意志との稀有な標本である」⁹⁾、また「天と地とを遠視し、過去と未來とを結合し、久しき以前に聞きしことの記憶を保持し、進んで心の儘に物を寫象するところの靈魂の、實に複雑なる敏活性且つま不思議な事物を案出し、また多くの驚異すべき技能の母であるところの熟練は人間に於ける神聖の確たる徴證である」¹⁰⁾等の諸々の言葉を以て、彼は創造の人間が立派な力を持つてゐたことを確證する。

けれども次に、現實の自然と人間とはかゝる創造のまゝでないことを述べる。現實に於ては、全く神の怒りと審判との前に恐れ戦くところの自然と人間とである。何故か。その原因は全く人間の罪による。始祖の原罪は、そのまゝ代々に傳へられて我々生得の性となつてゐる。「人間は現在、自由意志を剝奪されて居り且つ悲惨なる隷屬に歸せしめられてゐる」¹¹⁾これは「凡ての者が生れたがら」のことであつて、「母の胎内より生得の邪惡性」¹²⁾である。死が凡ての人に及ぶのが、その證である。「原罪とは靈魂の全部に滲透せる我々の性質の遺傳的壞敗または腐敗である」¹³⁾「我々の性質の全部が斯く壞敗し且つ邪惡にせられる」¹⁴⁾ことである。だから人間の一切、全身餘すところなく、本質にまで滲透して罪となつてゐる。従て先きに賦與せられたる「超自然的天賦は取り去られ」¹⁵⁾「自然

chen Theologie bei Calvin, 1935. Günter Gloede, Theologia Naturalis bei Calvin, 1935, etc. 自然法については後掲。

2) 創世 1:27
3) Institutio Christianae Religionis, 1559, I, 14:20. Calvini opera selecta ed. P. Barth, G. Niesel, III, S. 170. 中山昌樹氏譯第一卷一六一頁。
4) ibid.
5) ibid. 6) Inst. I, 15:4. 邦譯一六九頁。 7) Inst. I, 14:3. 邦譯一六七頁。

的天賦は罪によつて腐敗せしめられる¹⁶⁾。かくて神の像を寫すべき鏡は全く蔽はれた。

更に第三に、此の如き現在の自然と人間とは罪の中に全く執はれてはゐるが、而もなほ創造の神は審判の前に於て恩寵を垂れ給ふてゐるといふことである。「理性は全くは抹消されることなく、たゞ一部分は衰弱し一部分は壞廢せしめられて畸形の敗滅を示すだけである¹⁷⁾。要するに敗殘の姿なのである。こゝに於ては自然も人間も誇るべき何ものもない筈である。たゞ謙虚に神の前にあるべきである。「人間は生得的壞敗によつて腐敗するに至つたが、然しそれは本性から流出したものでなかつたと我々は云ふ。本性から流出したと云ふことを我々が否定するのは、それが原始よりして人間に賦與されてゐた本體的固有性と云ふよりも寧ろ人間に起つたところの添加的、特質のものであることを指示せんがためである¹⁸⁾。」

こゝに於てか、自然並に人間社會には恩寵が下されるのである。一般的には人間自體がこの燃え残りの理性と意志とを以て、一應の秩序を維持するのである。こゝに「地上的事象としての政治、經濟、一切の機能的技能と學藝とに關するもの¹⁹⁾」が存在する。「人間は生得的に社會的動物である故に、生得的に社會を培ひ且つ保存するやうに傾向付けられる²⁰⁾」、また「一定の市民的德義と秩序との普遍的印銘が存す²¹⁾」る故に、自ら「法によつて緊られる²¹⁾」。「こゝに於て凡ゆる國民並に個々の人間の、法に對する恒久的一致が生ずる。何故と云ふにその種子が教師や宗教家を俟たずに、普遍的に植えつけられてゐるからである²²⁾」。尤もその態様、方法、程度が決して完全にならないのは云ふまでもない。法が却て論争の具とせられ、惡の擁護となることも珍しくはない。そこに於て神の恩寵は特別に選ばれた者に更に特殊的恩寵が與へられる。それは信仰のある處にのみ與へられる。「自然は萬人

8) Inst. I, 4:1. 邦譯四一頁。

10) Inst. I, 5:5. 邦譯四九頁。

12) Inst. II, 1:5. 邦譯二二四頁。詩篇 51:5.

14) ibid.

17) inst. II, 2:12. 邦譯二四三頁。

9) Inst. I, 5:3. 邦譯四七頁。

11) Inst. II, 表題. 邦譯二三〇頁。

13) Inst. II, 1:8. 邦譯二二七頁。

15) Inst. II, 2:12. 邦譯二四二頁。

18) Inst. II, 1:11. 邦譯二二九頁。

16) ibid.

に共通してゐる、恩寵は然らず²³⁾であるから。この神の特殊恩寵に於て、律法は初めて眞に完うせられる。福音即ち愛の誠めとはこれであり、こゝに初めて自然は眞の自然(又は榮光の自然)として、創造は恢復せられる。

(2) 自然法²⁴⁾——創造の自然は、神の創造と賦與と支配とを意味し、同時に人間の壞敗とその恢復の恩寵——そこに律法や諸秩序が新しく建て直されることをも意味する。故に創造の自然は、初めから終りまで神の攝理の下にあることを意味する。即ち自然の秩序は全く神の秩序の下にある。従て自然の秩序又は自然法は、神の秩序と密接な關係にある。そこで先づその神の秩序の特質について少しく述べて見よう。

神の秩序は、まづ第一に動的支配であることである。神の支配は、我々を活動の中にとらへ、²⁵⁾「目を醒し効果ある動作のそして不斷の活動にいそむ全能である」²⁶⁾し、「宛も舵を取り萬事を整調し給ふものとしてである。それは眼に劣らず手に屬するものである²⁷⁾」といふので明かである。故に神の秩序は、神の攝理であり支配である。單なる「自然の永遠不變の法則」といふのは大分違ふ。

次に神の秩序は、偶然的・突發的に見えることである。これ神の支配が極めて動的・實踐的であることから來るのであるが、要するにそれは人間の側からは見えな、測り知り難い神の配意である。「隠されたる神の聖旨」(arcano eius consilio, arcano Patris consilio)²⁸⁾とは彼が屢々用ひたところであるが、かゝる意圖はなほ此の外にも、例ば「神の隠れたる攝理」(occulia Dei providentia)²⁹⁾「彼の秘れたる判斷」(occulia eius iudicia)³⁰⁾「神の秘れたる衝動」(secretum Dei impulsus)³¹⁾「神の隠れたる祝福」(arcano Dei benedictio)³²⁾「隠れたる秩序」(occulio ordine)³³⁾などの言葉を用ひてゐる。これカルヴァンの最も大切な思想の一つである。

19) Inst. II, 2:13. 邦譯二四四頁。

22) idbi. 邦譯二四五頁。

24) Calvin の自然法については、Soziallehren, 1923³, S. 657 f. (Calvin and the Reformation, 1909) p. 56 f. E. Doumergue, Jean Calvin

20) ibid.

21) ibid.

23) Inst. II, 3:10. 邦譯二七四頁。

25) 自然に關する前掲書以外 E. Troeltsch, Die A. Lang, The Reformation and Natural Law (Calvin and the Reformation, 1909) p. 56 f. E. Doumergue, Jean Calvin

第三に神の秩序は、特殊・個別的であることである。單に普遍的・一般的な所謂自然の法則とは非常に異なるものを含む。より具體的なものである。曰く「河床に沿ふて流に注ぐやうに命じ給ふが如き混亂せる運動の單なる一般的原則でなくて、個々の且つ特殊の運動に差し向けられるところのものである」³⁵⁾。また「神は各人に無差別に與へ給はない」³⁶⁾、「自然に生殖力が人間に賦與されてはゐるが、而も神は或る者らを子なしに胎し、或る者らに子孫をあらしめ給ふことを特殊の恩寵として受け取られんことを欲し給ふ」³⁷⁾と。

此の如くして神の秩序は、所謂自然の法則とは種々の點に於て違ふ特性を持つてゐる。より動的、より實踐的、より具體的である。人間の測るべからざる處にも神の秩序は働き給ふ。この隠されたる秩序の考へは、人間をして神との間に深淵があることを覺らしめ、距離感を與へしめる。こゝがカルヴン自然法の最も大なる特徴である。

次に、かゝる神の秩序としての自然法觀について述べるのであるが、その前に「法」一般に關する彼の考へ方を述べて置かう。彼は「法」を大體二つに分ける。第一は神法である。これは更に最も廣い意味での神法即ち隠されたる神の秩序をも含むものと、啓示されたる神の律法即ちモーゼの十誡の如きものを含む。第二は人間の法である。これは現實の人間がその曲められたる理性に基いて作れる律法及び恩寵の下に助けられて作つた法律又は道德法、慣習法、衡平法等をも含む。この第一の法は、「神の律法」(lex Domini)³⁸⁾「神的律法」(divinae legis)³⁹⁾「天よりの律法」(lex caelestis)⁴⁰⁾なども云ひ、第二の法は「人間の法律」(legis humanae)⁴¹⁾とも云はれる。カルヴンはなほ此の外に「法」一般を分けて、「自然の律法」又は「自然的律法」(lege naturalis)⁴²⁾と「成文の律法」(legem

V, 1917, p. 465 f. J. Bohatec, Calvin und das Recht, 1934, S. 1-131. その他 H. Hausscherr, Der Staat in Calvins Gedankenwelt, 1923, S. 6 f. H. Baron, Calvins Staatsanschauung und das Konfessionelle Zeitalter 1924, S. 33 f. etc.

25) 使徒行傳 17:28 參照。

27) Inst, I, 16:4. 邦譯一八一頁。

26) Inst. I, 16:3. 邦譯一七九頁。

scribam⁴³⁾としてゐるが場合ある。そしてその前者はまた「内面的律法」(lex interior)⁴⁴⁾と云ふものに近い。それは神の前に立つて人間が畏敬を覚え謙虚とならざるを得ないものである。従て、云はゞ良心といふものに近い関係がある。これを先きの分類と比較すると、大體に於て「内面的律法」又は「自然的律法」は、「神の律法」の方に入れられるやうに思ふ。従て、カルヴンの「法」の考へは、要するに神の法・内面的法・自然の法の分類と人間の法・外的法・成文法の分類との二つになる。そして前者が後者の根柢であり又その冠りである。

かくてカルヴンの法の觀念からすれば、自然の法といふのは、極めて神の法に近いといふことがわかる。そこに根柢を置き、そこから出發してゐるのである。また極めて内面的な法であることも注意されなければならぬ。カルヴンが利子を論ずるに當り、主としてモーゼ十誡により、またその講解に於て詳細に利子問題に觸れてゐることは、利子と自然法と神法との關係を自ら示すものである。即ち十誡の中の第八「汝盜む勿れ」⁴⁵⁾の講解に於て、「他人の財産を私に盜む者のみならず、他人の損失から利益を求めんとする者は不法の實踐によつて富を獲得するものと考へる」⁴⁶⁾と云ひ、貸付についても「神は今や衡平の説を強調する」⁴⁷⁾となし、殊に出埃及二二・二五、レビ記二五・三五、申命記二三・一九等に就て利子取得是認の根據を與へたが、それは全く衡平の原理によつてゐるのである。不當なる高利や惡意ある高利は勿論衡平の原理に反するが、なほ是非必要な者があるときに、債務者には富めるものもあり、生産に使ふものもあるのだから、それら一切を禁止するといふことは亦衡平の原理に反する。そこに貸與及び徴利の是認が根據付けられたわけである。衡平の原理、それは全く神の秩序であり神の義である。

28) Inst. I. 16:6. (P. B. S. 197. 邦譯一八五頁)但し、引照羅典語は原文にあるまゝを用ふ。以下同じ。 29) Inst. I. 17:1. (S. 202, 一九〇頁)。
30) Inst. I. 16:9. (S. 200, 一八八頁) 31) Inst. I. 17:1. (S. 202, 一九〇頁)
32) Inst. I. 16:9. (S. 201, 一八八頁) 33) Inst. I. 16:7. (S. 198, 一八五頁)
34) Inst. I. 16:8. (S. 199, 一八七頁) 35) Inst. I. 16:3. 邦譯一七九頁。

かくて要するに、カルヴンは利子の取得是認の根據の更に根底として、衡平(法)、自然法又は神法を置いたことは明かである。併しそれは飽くまでも彼特有の觀念・用法に於てあるといふことを忘れてはならない。即ちその自然法といふのは、大體に於て神法に屬するものを指すのであること、また衡平といふのは、神の義と愛とに基くものであることである。この點、先きに引照したモリネウスの利子論の根柢としての自然法、衡平法の考へとは餘程異つてゐるわけである。カルヴンは自然法を神法とし、モリネウスは自然法を慣習法として解した。モリネウスのこの考へは、彼以後の多くの利子論者又は法律學者によつて受繼がれた。従て近世の利子論の根柢としての自然法とカルヴンのそれとは著しく違ふものがあることを注意しなければならぬ。なほまた彼の自然法が如何に神法と密接なる關聯があるからと云つても、全然同じだとも直接に關係してゐるものだとも云ふのではない。神の側からは恩寵として神法の中に入れること當然であるが、人間の側からは深淵と距離とを感じるが故に、所謂自然法をそのまゝ總べて神の法と等しいと斷言することは出来ないのである。この點やスコラ的自然法觀とは異なるのではないかと思ふ。(一三・一〇・三〇)

- 36) Inst. II, 3: 10. 二七三頁。
 37) Inst. I, 16: 7. 邦譯一八五頁。
 38) Inst. II, 8: 6. (P. B. S. 348, 邦譯三三七頁)
 39) Inst. II, 8: 11. (S. 352, 邦譯三四一頁)
 40) Inst. II, 8: 6. (S. 348, 三四八頁) 41) *ibid.*
 42) Inst. II, 1: 22; II, 8: 1. (S. 264 f. 344. 二五二、三三四頁)
 43) Inst. II, 8: 1. (S. 344. 三三四頁) 44) Inst. II, 8: 1. (S. 344. 三三三頁)
 45) 出埃及 20: 15. 申命 5: 19. 46) Calvin's Commentary on the Four
 Last Books of Moses, III, p. 110. 47) *ibid* p. 122.